

〈論文〉

## 「よのなか」を授業に取り込む協働学習の開発

杉原 麻美

### 要 約

淑徳大学は、1965年に社会福祉の単科大学として開学した当初より、社会で役立つ実践的な「実学」を教育の理念に据えており、2014年に開設した人文学部もこの理念を継承した実践的なカリキュラムを展開している。本研究は、当学部の表現学科のおもに文芸表現コースの授業設計にあたり「実学」の観点から開発した授業モデルについて報告する。おりしも、わが国では2016(平成28)年12月に中央教育審議会による次期学習指導要領の答申が行われた。

この審議会の議論では、これまでに教育現場で多様に解釈が広がっていたアクティブ・ラーニングに関して「主体的・対話的・深い」という3つの視点が示されると同時に、改訂の基本方針に「社会に開かれた教育課程」の実現が示された。この方針は、高大接続や入試改革が進む大学教育にも影響すると考えられる。本稿では、このような社会から求められる大学のあり方を踏まえ、「よのなか」を授業に取り込み、上述のアクティブ・ラーニングを実践する協働学習の実践例と今後について述べる。

### キーワード

協働学習 アクティブ・ラーニング 社会に開かれた教育課程 主体的学び キャリア教育

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 「実学教育」の立場から捉える「よのなか」

淑徳大学は、1965年に社会福祉の単科大学として開学した。学祖は、大巖寺(千葉県)の住職であり社会事業家である長谷川良信(1890~1966)で、大乘仏教の理念を建学の精神とし、開学の目的は「社会福祉の実践を通じて『ひとりひとりの自立と社会の連帯』の実現に貢献しうる人材の育成」にあった。<sup>1)</sup> このように社会福祉の領域からスタートした実学教育は、その後領域を広げ、現在は千葉・埼玉・東京に4キャンパス7学部を擁し、人文学部はもっとも歴史が浅い学部で2014年4月に開設した。

この開設と同時に筆者は表現学科に着任し、メディアや表現に関連する仕事に就くことを目指す学生の教育に携わるようになり、本年で3年目を迎える。着任前は、企業内で情報誌やインターネットメディアのメディアづくりの経験を積み、編集企画や広告制作などのクリエイティブ人材の育成、社会人の

平成28年10月31日受付 平成28年11月24日受理  
すぎはら まみ：淑徳大学 人文学部 准教授

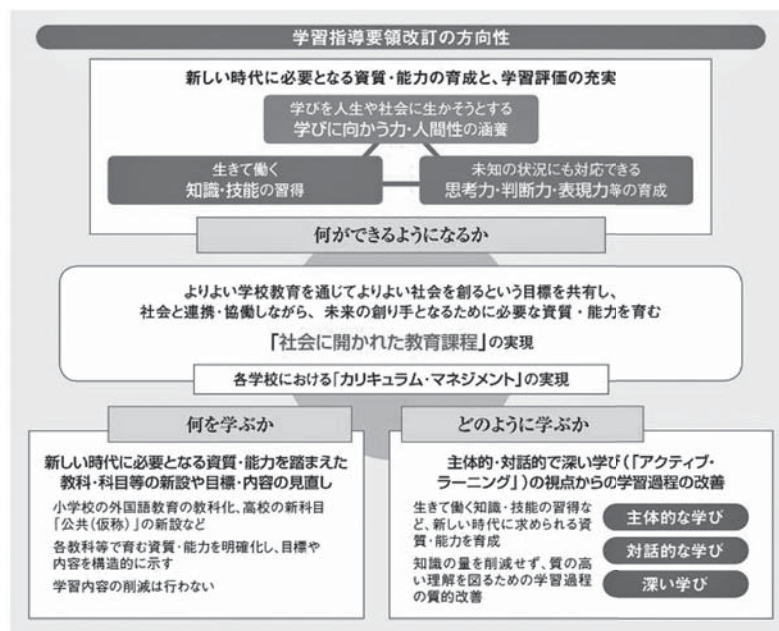


学びやキャリア教育に関する領域の仕事も行った。会社組織で内外の多くの人材と接してきた経験から、クリエイティブ系職種には創作上の基礎的で普遍的なスキルを養成すると同時に、長く活躍できる人材を育成するうえで「協働性」を高めることが重要であると感じていた。クリエイティブの現場ではプロフェッショナルが相互信頼のもとに協働することが強く求められるため、個人としてのスキル以上に協働性の有無が問われることが少なくないからだ。このため、本学科の教育においても、対話を通して他者理解を促し協働性を高める学習形態として協働学習(collaborative learning)を教育の中心に位置づけた。<sup>2)</sup> 学生の主体性を引き出すアクティブ・ラーニング型の授業が大学教育でも推奨される中で、他大学での取り組みやわが国の中学校、高等学校での授業改革事例、海外の事例などを参考にした。

一方、このような学習形態のノウハウと並行して、重視したのが「社会(よのなか)」との接続である。本稿の表題で「よのなか」<sup>※1)</sup>と表記した意図は、2003年に義務教育初の民間人校長として杉並区立和田中学校校長に就任し、校長退任後も教育改革実践家として活動される藤原和博氏が提唱する「よのなか科」を標榜したためだ。一個のハンバーガーから社会を理解していくなど、学習者に身近な題材から社会の仕組みを解き明かしていく「よのなか科」の授業は、正解が1つではない世の中の問題について生徒たちが主体的に考える機会となり、地域の人々や大学生などが学校とつながりながらカリキュラムが作られる点でも、その後の学校のあり方に大きく影響を与えた。<sup>3)</sup> 現在、多くの大学が産学連携の強化や、地域や業界の課題に取り組むPBL(Project-based learningあるいはProblem-based learning)を取り入れ、「よのなか」と大学教育を接続する方法は年々進化している。本学でも、千葉キャンパスや埼玉キャンパスでは先行事例が増え、これを支える組織体制も整備されつつある。小規模で歴史の浅い本学部においては、学科の特性に鑑みてどのような学習デザインが考えられるか検討する必要がある。

## 1.2 学習指導要領改訂から捉える「よのなか」

わが国の教育行政に目を転じると、2016(平成28)年12月には、文部科学省の中央教育審議会で2020(平成32)年度から始まる次期学習指導要領の答申が行われた。初等中等教育分科会の議論では、





これまでに各教育現場で多様な解釈が広がっていたアクティブ・ラーニングに関して「主体的・対話的・深い」という3つの視点が示され、改訂の基本方針には「社会に開かれた教育課程」が提示された(図1)。<sup>4)</sup>

また、教育機関から仕事領域への移行(トランジション)に関する研究や高等教育の実態調査を進める研究者によれば、雇用流動化や技術革新の著しい時代に不可欠な「一生学び続けるモチベーション」や「アクティブさ」には、失敗が許される教育機関にいる若いうちから本気で考え抜いたり熱く議論したりする経験と訓練が必要であると示されている。さらには、キャリア教育的な指導は本来、授業の中でされるべきで、「今、学んでいることと社会とが密接に関連していることを教師が折に触れて語り続ける」ことの重要性が指摘されている(中原、2016)。<sup>5)</sup> 実際に、高等学校では「総合的な学習の時間」のみならず、「国語」「数学」といった基本教科から「美術」「家庭」「保健」などの教科にいたるまで、教員がリアルな社会と接続して教材開発や授業改善を進める取り組みが広がっている。<sup>6)</sup> このように、教育機関が実社会から求められることの変化を受けて、授業に「よのなか」を取り込む視点をもつことは一層必要になり、大学教育においても同様の視点が求められている。

## 2. 「よのなか」を授業に取り入れる授業設計時の基本思想

前述の目的に鑑みて、筆者が担当する表現学科の専門科目のカリキュラム設計では、以下の基本思想のもとシラバス設計と各回の授業内容の吟味を行った。

### 2.1 「経験知」の重要性

筆者は現職着任に際し、表現学科の文芸表現コース内の専門科目全体のカリキュラム設計を行うよう指示を受けた。最初に行ったのは、文芸表現コースが取り扱う分野の設定と、1年次から4年次まで段階的に学べるよう各科目の位置づけを整理することであった。文芸表現コースの授業では、古典や海外文学を中心に扱う授業は各専門の先生に担当をお願いしているが、執筆演習が入る授業は大半を自身が担当することになっていた。これらの担当科目は、「ノンフィクション(取材記事、ルポルタージュなど)」と「フィクション(小説、脚本など)」の2つに大別し、それぞれが1年次から段階的に学習できるよう配置した。この両者を学びたいという学生も、どちらかを中心に学びたいという学生もいるため、いずれにも対応できるように配慮した。ノンフィクションでは、主要メディアや出版社の中で既に業界標準がある執筆ルールや入稿上の基礎知識を学ぶことが基本となり、フィクションでは、主な物語理論や表現技法について作品事例を通じて学んだうえ、創作に取り組む。

そして、これらの各科目の具体的な授業内容を吟味する段階では、「よのなか」との接続を前提に図2のような整理を行った。効果的な学習に必要なコンテンツを大きく4要素(図2の4つの四角枠)掲げ、これらを授業の中に組み入れた。ここで重要になるのが「経験知」である。実学教育では不可欠な要素であり、表現に関連

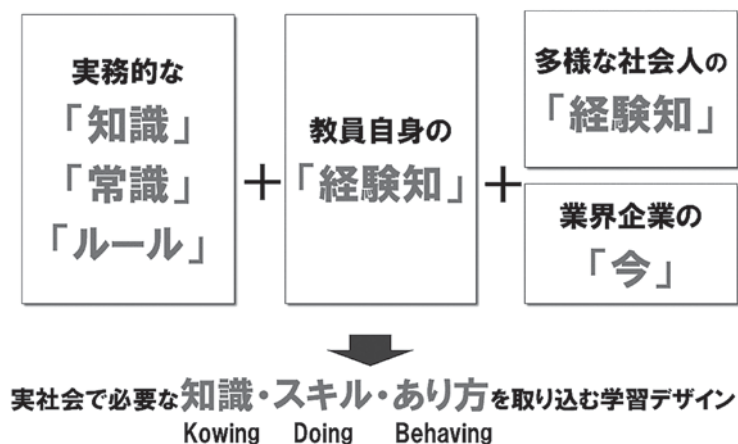


図2. 執筆演習を伴う専門教科のカリキュラム設計時の整理



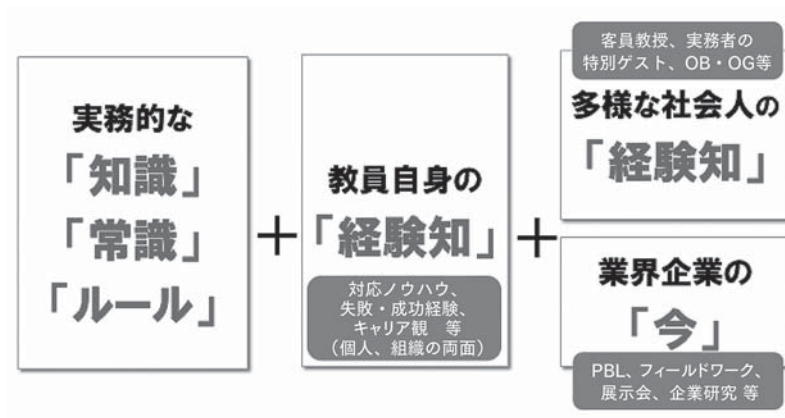


図3. 「経験知」と「今」の補強

する現場では圧倒的に経験知が物を言う。一人の教員の経験知には限界があるため、多様な社会人の「経験知」を特別ゲストという形で組み入れる必要があった。とくに前述の「フィクション」の執筆演習では、小説家、作詞家、脚本家の客員教授がその役割を大きく担っている。

また、業界の「今」を捉えるためにPBLやフィールド

ワーク、業界の最新動向に触れる展示会などへの参加も授業に取り入れている。「よのなか」を授業に取り入れるうえでは、とくに「経験知」と「今」を補強するための工夫が必要となる（図3）。

## 2.2 「よのなか」を取り入れる授業コンテンツの更新の必要性

これらの授業コンテンツは、以下の3つの観点から毎年見直しをしている。重要度に応じて、15回の授業の途中でも見直しを行う場合もある。

- ① 学生に響く「経験知」のマッチング
- ② 着目する業界と優先順位
- ③ 最新動向とマーケットデータ

①は、毎回の授業で記入を求めているシャトルカードや学期ごとの授業アンケートを中心に学生の反応を見ながら行い、とくに特別ゲストの選定や話題を調整する場合がある。同じ特別ゲストであってもテーマ設定や題材で調整可能な場合も多い。②は、③と連動した調整である。変化の早いメディア業界では、1年の間に業界のキーワードや動向が様変わりすることが少なくないため、参照する資料やデータは毎年更新していくことが不可欠である。

## 3. 「よのなか」を取り入れた授業の実践例

2015年9月～2016年12月における具体的な授業実践例を、「多様な経験知の共有」「企業と連携したPBL」「業界の今に触れる」という3つの視点から挙げる。

4

### 3.1 多様な「経験知」の共有

#### ① 教員自身の経験知を取り入れた授業例

（例1）教員がインタビューした・された記事から、企画意図と原稿を分析する演習

- ・「表現文化研究Ⅵ（創作表現）」3年次 前学期
- ・ノンフィクションで、おもに取材記事の執筆演習を行う授業。中盤の第8回に実施。
- ・教員自身がインタビュー取材した記事、逆にインタビュー取材を受けた記事を通読したうえで、この記事がどのような前提のもとで執筆されているかを考え、原稿を分析する。（どんな媒体？ 読者層は？ 読者層はどんな関心をもって読む？）



(取材を受ける側の意図は？ タイトル、見出しの戦略は？)

(原稿内容や原稿構成の工夫点は？) など

- ・ 学生の実験結果を共有した後に、実際の取材現場の状況説明とともに解説を加える。
- ・ 取材依頼の電話のロールプレイングなど、実践的な取材交渉についても学ぶ。

#### (例2) 実際に送った手書き礼状をもとにした執筆演習

- ・ 「文芸作品研究Ⅳ(執筆の技法)」2年次 前学期
- ・ ノンフィクションの執筆演習の授業。終盤の第14回に実施。
- ・ 教員自身が数カ月前に講演を聴き講演者へ送った礼状(実名部分はわからないよう削除)をもとに、その後に先方からメール連絡を頂いて直接お会いすることになったエピソードも紹介。
- ・ メールが主流の時代だからこそ、手書きの礼状を大切にする文化が残っている出版社や芸能界についての記事を提示。
- ・ 直筆礼状を書き慣れていない学生でも取り組みやすい七行礼状の例を挙げながら礼状を書く演習を行う。

### ② 多様な社会人の経験知を取り入れた授業例

#### (例3) 複数の客員教授によって分野を横断的に学ぶ執筆演習

- ・ 「表現文化研究Ⅴ(創作表現)」2年次 後学期
- ・ フィクションの執筆演習授業。「日常の中のドラマを切り取る」ことをテーマとして、60秒ラジオCM、シナリオ、エッセイ、作詞を横断的に学び、課題創作に取り組む。
- 第6回(作詞)、第9回(シナリオ)、第14回(エッセイ)で3人の客員教授が添削指導。
- ・ ジャンルを横断して学ぶなかで、フィクションに不可欠な構成員を身につける。
- ・ 各回2限続きの授業であるため、添削指導とトークセッションを組み合わせ、客員教授の経験知を多面的に吸収できるように授業を設計。

#### (例4) 映画監督への共同インタビューと執筆演習

- ・ 「表現文化研究Ⅵ(創作表現)」3年次 前学期
- ・ ノンフィクションで、おもに取材記事の執筆演習を行う授業。第9回に特別ゲストとして映画監督(松井久子監督)を迎え、学生による共同インタビューの演習を実施。(図4)



図4. 松井久子監督へのインタビュー演習の様相



事前にリサーチした情報とインタビュー当日の取材内容をもとに、各自が想定する媒体の特性に応じた記事原稿を執筆課題として提出。

- ・授業期間中に新聞掲載された監督のインタビュー記事も教材とし、新聞原稿の分析を実施。

### 3.2 企業と連携した PBL

企業と連携したPBLは、提携先との調整や授業への落とし込みなどに相応の時間を要する一方、授業科目の教育目的に合致する連携先をうまく見つけることができれば、学生が社会人との間の適度な緊張感のもとで達成感を得られる機会となる。とくに、編集表現コースの広告演習の授業は、広告企画案の作成とプレゼンテーションの機会を授業に接続しやすく、企業とのPBLは相性が良い。以下に、自身が担当した広告演習の授業での取り組み事例を挙げる。

#### (例5) デジタルサイネージの有効活用を企画・プレゼンする演習

- ・「表現文化研究Ⅱ（視覚表現）」2年次 後学期
- ・編集表現コースにおける広告の演習授業。人の「動線」を捉えた広告手法を理解し、交通広告、DM、フリーペーパーなどの広告の事例分析と広告制作を行う。
- ・授業では、今後大幅な市場拡大が期待されているデジタルサイネージ（電子看板）を取り上げており、2015年度には電鉄系企業の協力を得て池袋駅構内のデジタルサイネージを視察するフィールドワークを実施。
- ・2016年度は、印刷会社と地元の商友会、町内会の協力を得て大学にほど近いエリアにおけるデジタルサイネージの有効活用を企画するPBLを4回分×2限分の授業で実施。

#### (例6) 非日常イベントを企画・プレゼンする演習

- ・「表現文化研究Ⅰ（視覚表現）」2年次 後学期
- ・編集表現コースにおける広告の演習授業。人の「ライフイベント」を捉えた広告市場について学ぶ中で、企業とのPBLを実施。（図5）
- ・企業の方による市場理解のための講義の後、学生が各自で企画案を練った「非日常イベント」についてプレゼンし、講評を受ける。その後、グループに分かれて企業の方にもメンバーに加わって頂きグループディスカッションを実施。



図5. 非日常イベントを企画・プレゼンする演習授業の様様



### 3.3 業界の「今」に触れる

メディアやコンテンツを扱う産業では、業界の変化のスピードがきわめて速い。今年のヒットメーカーが5年後のヒットメーカーであり続けることも難しく、常に主要プレイヤーが入れ替わる傾向にある。

「時代に応じて変わり続けること」が求められる産業とも言える。本学科では、そういった業界の中で活躍することを志望する学生も少なくないことから、「常にアンテナを張り、他者との間でインプットとアウトプットを繰り返す習慣づけ」ができるような機会を授業内に組み込んでいる。以下に、ゼミ生対象の授業で取り組んでいる実践例を挙げる。いずれも学生間の「協働学習」となることを念頭に授業運営を進めている。

#### (例7) 各自の研究テーマと関連づけた展示会視察のフィールドワーク

- ・「表現文化調査研究Ⅰ」3年次 通期 (ゼミ生向け授業)
  - ・本授業では、前学期は教員が提示する題材(出版・エンタメ・メディアなどの業界動向)をもとに業界理解とマーケティング視点を養い、後学期からは各ゼミ生が自分で掲げた研究テーマに沿って研究の中間発表とディスカッションを繰り返して進める。
  - ・後学期の初回授業は、東京ビックサイトで開催された東京国際ブックフェアで各自の研究テーマに関連するブースの視察、セミナー受講を行った。(図6)
- 同日の夜はゼミ合宿として、各自が集めた情報と視察内容の報告会を開催。12名が参加。
- ・学生の中には、フェア開催期間の3日間(金・土・日)を通して参加した者もいた。

#### (例8) 毎週の授業冒頭で各自の着目するニュースの共有と考察を行う(チェックイン)

- ・「表現文化調査研究Ⅰ」3年次 通期 (ゼミ生向け授業。例7と同じ授業)
- ・後学期からは、学生の研究中間発表とディスカッションが授業の中心となる。
- ・ゼミ生(13名)が毎回交代で進行役を務め、機材セッティングや時間管理をひとりで行う。冒頭の情報共有コーナーのファシリテーションも担当する。
- ・冒頭15分では、各自が直近1週間の中で着目した新聞記事やニュースについて発表する。進行役は適宜ポイントをホワイトボードに書き留めるなどして、ファシリテーションを行う。
- ・各自の研究報告の発表においても、「10分発表+10分ディスカッション」の枠で全員が活発にディスカッションに参加し、思考を深める協働学習を行う。



図6. 東京国際ブックフェアでのフィールドワークの様様



## 4. ふりかえり・考察

### 4.1 学生の反応から見える効果

今回の「よのなか」を授業に取り入れる取り組みは、協働学習も含めた授業戦略全体の中で進めているため、単独での効果の数値化や測定は難しい。授業での反応と、各回の授業後に学生が記入するシャトルカードへのコメント記入状況、そして各課題への取り組み姿勢の変化から類推することになるが、学生に生じている変化は、以下の点に整理できる。

傾向① 教員自身のリアルな経験知を題材した演習では、学生の主体性が概ね高まる。

傾向② 特別ゲストへの反応は、学生全体への影響以上に、個別学生への影響が大きい。

傾向③ 企業とのPBLでは、学生の主体性が概ね高まる。

傾向④ 業界の「今」に触れる機会は、就職活動が視野に入る年次からの主体性を高める。

上記の②については、学生によって琴線に触れるロールモデルが異なり、志向の個別性に起因すると思われる。特別ゲストをリスペクトして休憩時間や授業後も熱心に質問する学生もいれば、とくに反応が変わらない学生もいる。よって、可能な限り多様なロールモデルと学生が接触する機会を正課および正課外のプログラムで作ることが肝要であろう。

### 4.2 コンテンツ補強に必要なもの

「経験知」や「業界企業の今」を取り込んでいくうえで難しいのは、これらがきわめて人的リソースに依存するものであるという点だ。たとえば、多様な経験知を確保するために郊外のキャンパスに特別ゲストを招聘することは、一般にハードルの高い依頼になる。スポットで1回の招聘であっても、先方へのメリット提案や事前の綿密な打合せが必要になり、教員のコーディネート業務とそのための時間と労力の確保など負担は大きい。とくに、卒業生が出ていない新設学部ではOB、OGに依頼することも難しいため、何らかの持続可能なサポートが必要であろう。表現学科のように多様な経験知を揃える必要がある学科では、特別ゲストをどのように迎え入れるかというノウハウを蓄積していきたい。

なお、最近では高等学校でキャリア教育や総合学習の位置づけで多様な社会人講師を招聘する取り組みが広がっているが、そのコーディネート役を担っているのは多くの場合、特定の非営利組織(NPO法人16歳の仕事塾など)や進学情報で大学や専門学校とパイプをもつ企業である。こういった社会的な役割分担が広がることも期待したい。

## 5. 今後の課題・展望

8 2017(平成29)年度には、淑徳大学人文学部は開設4年目の完成年度を迎える。学科における「3つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)」に鑑みて、学生が志望する職域で活躍できるための大学教育のあり方について引き続き探求し、実践を重ねていきたい。その際には「普遍性」と「時代性」の2軸をバランス良く学べる学習デザインが必要であろう。つまり、10年後30年後にも求められる普遍的な力と、5年後10年後への時代変化を見据えて身につけておきたい力との、両面の育成である。この後者において筆者が大学生への学習機会を広げる必要性を感じているのが、「世代間が交流する中で生まれる学習機会」と「ICTを活用した学習機会」である。少子高齢化や単身世帯の増加が加速する21世紀社会では、世代間で連携して知恵を出し合える人材やICTを活用して創造的に課題解決できる人材が求められる。大きな設備や投資がなくとも、人的ネット



ワークやICT活用のアイデアによって多くの支持者や受益者を生み出せる時代であるからだ。表現学科の学生のもつソフト力を発揮できる機会も広がるはずだ。

この潮流を捉えた学習機会の創造を念頭に、2016(平成28)年度より「世代間交流による協働学習に関する研究—学生・児童・親世代をつなぐ学習デザイン—」<sup>7)</sup> という3ヵ年の研究が始動した。この研究では、夏休み期間中に大学生が小学生とともに企業で働く親世代や大学構内を取材し、タブレット端末で新聞制作を行うなどのワークショップを行っている。世代間交流とICT活用を取り入れた協働学習プログラムで、本学の学生も他大学の学生とともに2名が参加し、教育効果の計測と今後の広げ方を検討している。このような正課外の活動も含め、学生の社会人基礎力を高めるための大学教育の開発に努めていきたい。

## 引用文献

- 1) 淑徳大学 大学ホームページ「建学の精神・理念 —開学と建学の精神—」より  
<http://www.shukutoku.ac.jp/university/shukutoku/spirit/>
- 2) 杉原麻美「文芸創作における協働学習の可能性」『淑徳大学人文学部研究論集』淑徳大学人文学部、2016、pp.1-16
- 3) 藤原和博『世界でいちばん受けたい授業—足立十一中「よのなか」科』小学館、2001
- 4) 荒瀬克己「次期学習指導要領が目指す 社会に開かれた教育課程の実現」リクルート進学総研『キャリアガイダンス』vol.414 2016、pp.10-13
- 5) 中原淳「学校から社会への円滑なトランジションのために」前掲書4) pp.40-42
- 6) 「授業レポート 社会につながる11の授業」前掲書4) pp.15-39
- 7) 杉原麻美「世代間交流による協働学習に関する研究—学生・児童・親世代をつなぐ学習デザイン—」平成28年度～平成30年度 科学研究費助成 基盤研究(C)・研究課題番号16K00719

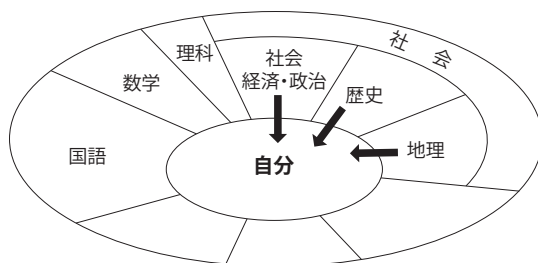
注1) 本稿で示す「よのなか」の定義は、藤原和博氏が「[よのなか]科」の世界観として下図で示した「自分と社会とのインターフェイス=[よのなか]」に準じる。

藤原和博『世界でいちばん受けたい授業 [よのなか]科 実践記録』筑摩書房、2008、p.14 より

従来型の社会科と[よのなか]科の世界観の違い

～世界の見方を逆転させる試み(世界→自分ではなく、自分→世界へ)

【従来型の社会科】の世界観



【よのなか】科の世界観

